
白銀の雪

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀の雪

【Nコード】

N7571G

【作者名】

優

【あらすじ】

雪の降る季節…リストラされて仕事無くしてしまった斉藤秀一43歳。所持金も残りわずかになってしまった。秀一は生きるために仕事を探し回る。

雪……それは見るもの全ての心を真っ白に洗い流してくれる魔法の物質……

「はぁ……今日も仕事は見つからなかったな……」

俺はつい最近、リストラされてしまった。

最近是不景気だからしょうがないのかもしれない。

今年で43歳の誕生日を迎えたが、こんな歳ではなかなか仕事も見つからない。

リストラされてから明日でちょうど1ヶ月になる。

再就職は難しいとわかってはいたが、まさかこれほど大変だとは……

貯めておいた貯金も1ヶ月の生活費でほとんど無くなってしまった。

所持金は千円札一枚と小銭がちょっと。

家賃が払えなくなり、住む場所も無くなった。

家族はいない。

女性には全く縁^{えん}がなく、手を繋いだ事すらない。

早く仕事を見つけないければ飢え死にしていまいそうだ。

今日も手当たり次第にバイトを探して、面接を受けてきたのだが、どこも雇ってはくれなかったのだ。

「はあ……」

俺がため息を吐くと、真っ白な息が出た。

今は冬だ。

当たり前のように寒い。

そのうえ、雪まで降っているのだから余計に体温が奪われる。雪は積もってないが、時間の問題だろう。

住む場所がないので、路上で寝ることになるのだが雪が降っているので気が引けた。

「雨宿りならぬ雪宿り出来る場所を探して今日はそこで寝よう」

俺は独り言を呟^{つぶや}いて見せた。

我ながらつまいことを言ったと自画自賛してみる。

退屈だ……

俺は雪の降る道を歩き回り、寝る場所を探した。

道路には車が走っており、歩道には人が歩いている。

ごく普通の光景だが、道行く人々を見て羨ましいせうましいと思った。
みんな仕事をやっていたり、親にご飯を食べさして貰っているよう
に見えたからだ。

毎日三食、食卓にご飯が並ぶ光景が一般的なのだ。

俺も1ヶ月前まではそんな一般的な生活をおくっていた。

リストラによっていきなり窮地きふちに追い込まれた。

そのストレスのせいか、俺の髪は所々抜け落ちてしまった。

「お、良い場所だな」

俺は一人で呟つぶやいて寝るのに最適な場所を見つけた。

マンションの地下だ。

俺が立っている歩道から階段が降りていて、マンションの地下へ繋がっている。

階段を降りて地下の様子をつかかったが、どうやら駐車場のようだ。

車があちこちに駐車してある。

俺は車の後ろに空いたスペースを見つけ、そこに寝転んだ。

「よし、寝るぞ」

3

2

1

ぐう
〜
〜

腹が鳴った。

俺は腹を満たすために駐車場を出て、近くのラーメン屋でチャーシュー麺を頼んだ。

「いただきます」

俺は割り箸を割りながら呟いた。

ラーメンは雪によって奪われた俺の体温を暖めてくれた。

やはり冬の日にはラーメンは合う！

「ごちそうさま」

俺はそう言って会計を済ませた。

490円も持っていけた…

これで俺の所持金は500円玉が一枚と10円玉が少し。

合計で520円だ。

俺の全財産はあと一食で無くなってしまう…

俺はラーメン屋をあとにして、さっきの駐車場へ戻ってきた。

寒かったが、意外に早く眠りにつくことが出来た。

……

……

…

「んあ…」

俺はそんな間抜けな声をあげながら目を覚ました。

俺が起きると必ずやることがある。

財布チェックだ。

俺が寝ている間に盗られてしまったら大変だからだ。

とは言っても500円しか持っていないのだが…

俺は眠たい眼を擦りながら駐車場から地上へ出た。

「……綺麗だ…」

俺が見たのは一面の銀世界だった。

「やはり積もったか…」

積もると思っていたが、まさかこんなに積もるとは…

厚さ10センチ程に積もった真っ白な雪。

見ただけで心が洗われているみたいな感覚に陥る。おちい

「さて、仕事を探すか！」

俺は自分自身に言っただけで気合いをいれた。

仕事を探して1ヶ月…

このまま仕事を見つけれなかったとうとうと不安になる。

だが、白い雪を見ていると仕事が見つかりそうな気がした。

俺はコンビニへ向かい、仕事のが載っている本を手にとった。

年齢制限が無い仕事を見つけ、電話をするとすぐに面接へ呼ばれた。

俺は再び気合いをいれて面接を受けに行った。

雪がかなり積もっているので歩きづらかったが、頑張っただけ面接会場を目指す。

すると大きな十字路にたどり着いた。

ここを真っ直ぐ行けばたどり着く。

信号が青になったのを確認し、俺は歩き始めた。

………

面接会場へたどり着いたときにはすっかり俺の身体に雪が積もっていた。

俺は入り口に入る前に身体についた雪を払い落とした。

そして、面接が始まった。

「お名前は？」

面接官に訊ねられた。

「さいとう しゅういち 斉藤秀一です」

………

………

…

結果は………

採用！

なんと明日から働かせて貰えるようになったのだ。

嬉しさを抑えきれずにスキップをしながら十字路を渡った。

だが…次の瞬間。

大型のトラックが俺のすぐ近くに迫っていた。

俺は喜びのあまり、信号無視をしてしまったのだ。

トラックの運転手は飛び出して来た俺にぶつからないように急ブレーキをかけたが、雪が積もっていたせいでスリップしてしまい止まれない。

俺の頭の中は真っ白になった。

ドン！

鈍い音と共に俺の意識は一瞬で吹っ飛んだ。

雪……それは見るもの全ての心を真っ白に洗い流してくれる魔法の物質……

時々、頭の中でさえも真っ白に変えてしまう事がある……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7571g/>

白銀の雪

2010年10月28日06時39分発行